

論点

動物介在ケア 「思いやり社会」創造の一環

早崎 峯夫（山口大学農学部教授）

近頃は、長引く不況の影響も加わって人々の心はすさび、犯罪は増え、家族の絆も薄いものとなり、独居老人は増え、社会は精神的貧困に陥っている。

こうした中で、信じ合える友として愛玩動物を飼う人が増え、その結果、孤独感がなくなり生活に張りや希望が出てきたという人が激増している。こういうペットたちは伴侶動物とも呼ばれている。

今、精神的に豊かな社会を取り戻そうとさまざまな試みがなされているが、その一つに社会的弱者を対象とした動物介在ケア活動がある。一般的にはアニマルセラピーという呼び方で広く知られるようになった。動物介在ケア活動とは、犬や猫その他の小動物などを用いて、特別養護老人ホームや知的障害者施設などを訪問して、入居者の方々に動物たちとの楽しいひと時を持ってもらうことで心をリラックスしてもらう癒しのための活動をさす。この活動によって、たとえばボケが軽くなったとか、性格が穏やかになったとか、自閉症児童が喋るようになり心を開くようになったといった活動効果が多く報告されている。

この活動は、動物のしつけ訓練と健康と衛生の管理、それに入居者への対応や言動への配慮などに十分な経験を積んだ方をリーダーとしたボランティアグループにより支えられている。活動に用いられる動物は犬や猫が多いが盲導犬や介助犬のような特別な調教は必要としない。素直でやさしく、人を信頼する性格に育てられた動物ならば十分である。最も重要なことは、定期的に血液検査や検便、尿検査を行って長期間にわたり健康状態が確認されている動物を用いることである。

活動を受け入れる以前の施設の多くが動物からの病気の感染や動物の被毛の処理あるいはしつけ不十分による咬傷事故や引っ掻き事故など、衛生面や安全面に不安を持っているが、受け入れた後では施設の大半が、動物と触れ合った結果入居者の方たちの中で共通の話題が増え精神的に安定したと答え、不安の多くが払拭されたと答えている。

実際には、活動を始めるにあたって活動グループと受け入れ施設側との間で活動に関連して双方の責任を明確にした覚書を取り交わした上で、活動が実施されている。

一般の人の中からは、このような活動に用いられる動物はストレスが溜まってかわいそうだという指摘がある。しかし、訪問を受ける施設の職員や入居者の方々も知っていることだが、動物は自分を可愛がってもらっていることが分かっているむしろ嬉しがっているのである。

海外では「人と動物の絆(ヒューマン アニマル ボンド)国際会議」と呼ばれる世界会議が3年ごとに40カ国以上から7-800名もの医師や医療カウンセラーあるいは獣医師や動物の専門家を集めて動物介在ケア活動や動物介在療法について新活動方法や新治療法の研究報告が活発に行わ

れている。

人と動物は「お互い様」の関係にあり、相手への「思いやり」は何も人と人の中だけのことでない。人と動物が「お互いを思いやる」関係も思いやり社会の創造ではないだろうか。このように発想を転換させて、新しい取り組み方の「思いやり社会」を創造していくことを考えてみる
ことが大切である。

獣医師。専門は獣医内科学。「健康とアニマルセラピー」を研究。57歳。